

法華経と在家信徒

T・V・エルマコフ
佐藤裕子 訳

大乘仏教の最も重要な經典である『法華経』の出版・翻訳と研究における国際的学術協力は、その輝かしい例として、ロシアの仏教学者であるアカデミー会員S・F・オルデンブルクとF・I・シエルバツコイが創刊した国際学術出版シリーズ *Bibliotheca Buddhica* 所収のサンスクリット文献 (BBX) の出版 (一九二二年) を挙げる事ができるでしょう。

このテキストの刊行者となったのが、H・ケルンと、日本の優れた仏教学者である南条文雄でした。序論で南条文雄は、この出版の経緯を明かしています。法華

経がロシア・アカデミー出版に登場するまでの三十年間、南条文雄は、F・マックス・ミュラーの指導のもとでサンスクリットを学んだロンドンの王立アジア協会図書館からテキストを全部書き写していたのです。

南条の同僚の笠原研寿は、南条に協力しました。つまり、写本が書写された後に、ケンブリッジで彼らは、ケンブリッジ大学図書館にある二つの写本とテキストの校合を行ったのです。残念ながら笠原研寿は病気のため一八八二年に日本に帰国しなければなりませんでした。南条は、その作業の結果、ヨーロッパの図書館

に保管されていた法華經のあらゆる異文をほぼ知るこ
ととなりました。⁽¹⁾

一九一二年から一九一六年まで日本に留学した、アカデミー会員F・I・シエルバツコイの弟子O・O・ローゼンベルクは、仏典の文献学研究の発展における南条文雄の貢献を高く評価しました。彼は、ヨーロッパのインド学にあった原則を南条教授が日本にもたらし、また、それが一九二〇年代に至るまでの日本仏教学の独自性を決定づけたと書き残しています。⁽²⁾

したがって、私たちのシンポジウムは、「日露の仏教学者たちの学術協力」というサンクトペテルブルクの伝統を継承しているのです。

最初に、東京大学への留学時に日本仏教を具体的に知ったO・O・ローゼンベルクの見解に注目してみましよう。彼は、大乘仏教流布の過程を、宗教的理念がたいへん分かりやすく普遍的であることにより説明しています。さらに、宗教の目標がより早く達成されるということについて、「それが必ず達成されることが証明できるならば、(中略)このような教えは大きな成功

を収めるはずである」と続けています。⁽³⁾

今回の報告の目的は、法華經思想の広範囲の影響を通じて、極東において日常文化の新しい象徴的な宇宙がどのように形成されたのか、つまり、仏教的な世界観そのものがどのように定着したのかを示すことです。言葉を換えれば、仏教の徳を受け継ぐことで人は何を得たのか、つまり、日常の実践という文脈において、仏教的価値を身につける現実的效果は何なのかということです。

大乘仏教の普遍性は『法華經』の中で余すところなく示されています。あらゆる伝統文化にとって特徴的なものが、具体的に精彩豊かに表現された善き死後を得るというの思想と、呪法の実践を広く行うことです。呪法の実践のひとつは、体系的にリズム化されたテキスト(サンスクリット語でダーラニー)を特別な方法で読誦することです。信者をできるだけ増やすために、法華經では、呪文の実践に特別な章が割かれていると考えられています。善き死後は、經を書写する者に保証されます。

私たちから見えてとりわけ重要なのは、經典各部の仏教教義のテキストに残された儀式文化の特別な分析でしょう。アビダルマ論書において儀式を否定されていないが、三宝のテキストにおいて、「まだ仏教徒ではないが、三宝の中に避難所を得ようとしている人々」のメンタリティを考慮する必要が説かれています。もし三宝が、彼らに理解できる言葉で説明されるならば、彼らの日常世界に受け入れられるでしょう。

アヴァローキテーシュヴァラ（観音）菩薩を讃えた『法華經』第二十五品が、独自のテキストとして機能している事実に注目してみましょう。その内容を検討すると、まず最初に、災いの状況の一覧が紹介されていることがわかります。

最初に、火、水といった天災、さらには、武器による危険、流刑、略奪や毒の脅威です。個別のものでは、神話上の存在（夜叉、羅刹）や敵対的な魔の働きが引き起こす災いがあります。こうしたすべての状況が危機的なものであり、文化人類学の用語では、特別な「危機の儀式」、つまり防護の呪法的行動をとることを要求

されます。

法華經は、呪法的行動の選択肢として、観音菩薩の名を記憶し唱える実践、危機的状況の際の観音菩薩への祈祷を提案しています。在家のための仏教文献の題材は、「日常問題を選択的行動で解決する」ことを流布する一助となったのです。

したがって、仏教への改宗の対象としての「有徳の在家」になることは、速やかに効験あらたかな救済をもたらす強力な庇護者の保護下に入ることを意味したのです。

中国、さらに日本の仏教信者の日常的信仰実践の中に、観音崇拜を統合することは、『法華經』第二十五品と内容的に関係のある多くの説話文学が、主題を展開するなかで実行されました。説話の主人公が在家信者としての徳を獲得し強化しますが、その前に、災厄状況での菩薩の効験ある救済のエピソードが述べられます。神的救済者の速やかな反応の誇示こそが、まさに主人公を徳へと促すのです。また、主人公に続いて読者も仏教教義に対する信仰を強化する方向へと促され

るのです。

まず、日本の題材よりも歴史的に早い中国仏教説話から、以下の点を検討してみましよう。

1. 劉義慶『宣驗記』（五世紀）。「死刑からの救済」の主題。主人公は、殺人の罪で死刑に臨んでいます。彼は牢獄に監禁され、枷をはめられています。他の囚人たちの助言に従い、彼は観音の名を絶え間なく念ずる誓いを立て、死刑から免れた場合、五層の仏舎利塔を建て、僧団に奉仕することを約束します。菩薩の名と誓いを繰り返し十日間経った時、囚人の枷は解け、また、死刑の途中で刀は砕けました⁽⁴⁾。

観音信仰者を死刑にする試みにおける「砕ける刀」のモチーフは、仏教説話に最も広く見られるものの一つであることを指摘しておきます。日蓮を死刑にしようとする場面を描くアポクリファ（種々の「正典以外の書」）の題材の中に、このモチーフが同じく使われています。

諸題材のこのタイプの主人公たちが、誓いを立てている点は注目に値します。つまり、死を免れた後で、

仏教教団の後援者となり、仏舎利塔を建てるなどの誓いです。つまり、教えに従った敬虔な在家信徒と同じように行動する心構えを示すのです。

嵐からの救済もまた、広く普及している題材です。通常その主人公は、商品を運搬する商人です。これは偶然ではないと思われます。釈尊の伝記が証明しているように、仏教教団への最初の寄進者たちは実際、強信の商人たちでした。この種の題材は、まさに経済的に自立した中国の社会層を仏教へ惹きつける目的で作られたといえるでしょう。劉義慶の「観世音が嵐を静める」という説話に注目してみましよう。主人公は塩を運び、嵐に遭遇します。観世音のことを念じ始めると、波が静まります⁽⁵⁾。

2. 王琰の『冥祥記』で紹介された類型的に似た主題。

「竺長舒の奇跡を行う力」という説話の主人公は、商人です。彼は、絶え間なく『観世音経』を唱えることで、自分と近隣の家々を火事から救います⁽⁶⁾。「観世音が囚われの身から救う」という説話は、兵士集団が

囚われの身から奇跡的に救済される物語です。仏教僧が、彼らに、観世音菩薩へ心からの祈りを捧げるよう助言するのです。⁽⁷⁾「観世音の神の光」という説話の中で、

菩薩への祈りは、河川の渦に巻き込まれた小船を救うことを保証します。神的な介入は、ある人々を送り小船を引き上げさせることと、川岸に火を焚くことで実現されます。⁽⁸⁾

「観世音が避けがたい破滅から救う」という端的な題名をもつ説話では、難民の数家族が捕虜となります。枷をはめられた主人公は穴に入れられています。熱心に観世音に祈ること、彼は枷から自由になり、逃走します。⁽⁹⁾

水上での救済の状況は、「観世音は呼びかけに現れる」という説話の中でうまく生かされています。⁽¹⁰⁾寺主である主人公は、小船で湖を渡っています。彼と一緒に女性が乗っており、彼は、彼女から寺の必要品を購入しなくてはなりません。嵐が突然襲ってきた時、彼は、自身の罪のために災厄がもたらされたのだと考えます。女性を救いたいと願いながら、彼は『観世音経』を説

経し始めます。すぐに大きな船が出現し、彼らはそれに乗れり、彼らの乗っていた船は沈みます。

「観世音が火と水から救済する」という説話では、重複するドラマ性によって主題が構成されています。⁽¹¹⁾菩薩への祈りは主人公を、小船での火事の下から救い出すのです。

不信心者を仏教へ改宗させるための経の効果は、「民衆は観世音に自身を委ねる」という説話で、強調されています。⁽¹²⁾仏教徒たちが住みついた町が侵略の脅威にさらされた時、その地域の僧が観世音へ祈りを捧げるよう全員に命じました。空から、侵略者に向けた『観世音経』が落ちて来て、僧は救済を確信し、そして町は救われます。

先祖に対する伝統的な信仰を有する文化において（インド、中国、日本）、子宝の獲得というテーマは、常に極めて切実です。まさにそのために、『法華経』第二十五品の広く知られている解釈の中で何度も強調されているのだと思われます。この品では、子孫について語られています。経の中で、もし息子あるいは娘を望

む女性が観音菩薩へ読経し、観音菩薩へ寄進するなら、

その女性が産む子どもたちは、多くの長所をもつとされて⁽¹³⁾います。広く流布された仏教説話の中で、観音への

祈りは、男系子孫の獲得を助けています。男系子孫の欠如、これは儒教文化においては深刻な社会的短所です。この点を「観世音が息子を授ける」という説話が

強調しています。⁽¹⁴⁾主人公は、五十歳まで息子のいなかった道士です。仏教僧は、息子を授かるために観世音経を説誦するよう、彼に勧めます。道士はその通りにし、すると間もなくその妻に男子が誕生します。説話の主人公は、当初は仏教徒ではなく、菩薩により実際に男系子孫を授かることで仏教へ改宗する状況が示されていることは、注目に値します。

唐臨が編集した説話集の中の「沙門の相貌をした観音」の題材は、死に瀕した病人の治療を強調しています。官吏が病氣となり、観音へ呼びかけます。すると、僧の顔をした観音が彼の前に現れ、病氣を治すのです。⁽¹⁵⁾

このように、仏教の教訓文学は、法華経で示された、「日常生活の災いを観音が効果的に救済する」という状

況を、すべて文字通りに再現しているのです。

類型的に、これらと似た題材は、より後期の『日本霊異記』『日本往生極楽記』『法華験記』に集められた、八―九世紀の日本の説話にあります。これらの説話集のロシア語への翻訳を実現したのが、A・N・メシエリヤコフです。⁽¹⁶⁾

それぞれ、僧・景戒、官人・慶滋保胤（出家し「寂心」や僧・鎮源といった、これらの著作の作者たちが、文字文化の担い手であったことは重要です。このように、こうした著作説話が、釈尊の教えの説法の形式であり、とりわけ法華経の思想と主題を広める形式であったことは十分あり得ます。菩薩の保護が約束された日常生活の状況こそが、信仰者たちにとって、こうした主題を説得力のある教訓としたのです。

きわめて実験的なのが、説話「法花経を写さむとして願を建てし人の、断えて暗き穴に内り、願力に頼りて、命を全くすること得し縁」(『日本霊異記』下巻十三話)⁽¹⁷⁾です。主人公は、鉾山で働いており、堅坑の中に生き埋めにされます。親戚たちは、彼は死んだと思い、祈祷

を始め、法華經を書写し、観音の像を描きました。その頃主人公は、經を書写する誓いを果たしていないことを思い出し、もし救われるなら、經の書写をするという新たな誓いを立てます。突然彼は、指の厚みくらいの隙間から自分の上に差し込む細い太陽の光と僧に出会います。僧は、美味しいご馳走を運び、これは、主人公の家族が僧に寄進した食物と飲み物であり、主人公が泣いているので、やって来たのだと説明します。僧が去った後で主人公は、埋立の上方に割れ目を見つけ、叫び始めます。叫び声は、そばを通りかかった人々の耳に入り、彼は解放されます。主人公が、官人に自身の救出を語ったところ、その官人は確信を得て、信者たちを率いて、一緒に法華經を書写し、それを供養しました。

ここでいくつか主題の様式を分けることができます。第一に、親戚たちの心からの信心と、彼らが亡くなったと考えていた主人公の死後の運命を良くするために菩薩に捧げた祈りです。僧侶への彼らの寄進は結果として、埋められた鉢夫へ僧が運んだ食物になりました。

二番目は、主人公自身が、誓いの不履行を後悔し、救済のために新たな誓いを立てることです。そして最終的に、官人が信心をさらに確固たるものにし、信仰者の集団を設立する、つまり、ダルマの流布に協力し始めることが注目に値します。

靈驗あらたかな救済の受け手にたびたびなるのが、僧侶です。たとえば、説話「観音菩薩を憑み念ぜしによりて現報を得し縁」(『日本靈異記』巻上六話)は、観音を念ずることで、橋の無い川を渡ることができた僧について語られています。突然、船頭である渡し守が現れ、僧をもう一方の岸に渡し、跡形もなく消えます⁽¹⁸⁾。

渡河と渡し守の形象は、寓意を含んだ、より深い意味をもっていると思われます。それは教義上の隠喩の文脈で解釈できます。この場合、隠された教えは、観音が渡し守の姿で救済に現れる、説話の結びの部分にあります。

世親の『俱舍論』に目を向けてみましょう。これは、サンスクリットのインド仏教の伝統の枠内で、つまり、法華經のオリジナルと同じ文化・世界観を有する地帯

で成立しました。この論書は、大乘仏教の文化的領域すべてにおいて、出家修学文学に必須のものであり、仏教徒の教養ある階層に教義上の隠喩を広めることに貢献しました。菩薩の本質は、第三章「世間品」の第九十四偈で説明されています。すべての生きとし生けるものへの私心なき憐れみ深さが、菩薩たちが「苦しみの大いなる流れから分けへだてなく救い出す（於苦瀑流濟諸含識。大正蔵29・63c22）」ことを目的としている点で表現されています。⁽¹⁹⁾

渡河のイメージは、『法華経』第二十五品の中で、隠喩的に用いられています。

観音は、さまざまな境涯の信仰者たちを向こう岸へ渡す（つまり輪廻からの脱出）という課題に対応するさまざまな顔をもっています。⁽²⁰⁾ まさに、この隠された意味をもつのが、僧侶や船頭である渡し守に関してこれまで触れた説話なのです。

輪廻からの解放を根本的に妨害する状態、すなわち煩惱を説き示すための一連の隠喩を考察してみましよう。（俱舍論の）第五章「随眠品」の第三十八偈への著

者自身による注釈の中で、世親は次のように語っています。「経の中で、隠された激発的な傾向性は、高揚、奔流、束縛（枷）や執心と呼ばれています（即上所説隨眠并纏。経説為漏瀑流輓取。大正蔵29・107b20）。「束縛（枷）」の隠喩は、「生命」に対しては「存在の枷（有輓）」として、「意識」に対しては「感性の枷（見輓）」として用いられています。⁽²¹⁾

法華経の最も鮮明なイメージが、日常生活の題材を用いた、中国や日本の仏教説話で正確に描写されていることを思い出しましょう。それは、枷や鎖の破壊であり、牢獄からの解放なのです。

このように、釈尊の教えの信奉者たちや、その教えに入門する心構えのある者たちといった幅広い層へ向けられた論書や経典、そして教訓説話集の中で用いられているイメージ群は、共通の用語によって、意味的に統合できるのです。

原注

- (1) Saddharmapundarika. ed. by prof. H. Kern and prof. Bunyiu Nanjio / BBX, サンクトペテルブルク、一九二一、I・IV頁。マックス・ミュラーのもとでの南条文雄と笠原研寿の修行時代は、一九五〇年代の前嶋信次の論文で考察されている。参照：湯山明、Eugène Burnouf. The Background to his Research into the Lotus Sutra. *The Intern. Research Institute for Advanced Buddhism*. Tokyo. 2000. p. 143.
- (2) O・O・ローゼンベルク『仏教論叢』、モスクワ、一九九一年、六三頁
- (3) 同、一九七頁
- (4) 王延秀『感応伝』等参照。中国語からの翻訳、序文および注釈は、M・E・エルマコフ、サンクトペテルブルク、一九九八年、四七・四八頁
- (5) 同、五七頁
- (6) 同、八三頁
- (7) 同、一〇二頁
- (8) 同、一〇七頁
- (9) 同、一一五頁
- (10) 同、一二五頁
- (11) 同、一二七頁
- (12) 同、一二八頁
- (13) 『法華経』参照。中国語からの翻訳、解説および結び

- の論文等は、A・N・イグナトヴィチによる。モスクワ、一九九八年、二八三頁
- (14) 王琰、一四九頁
 - (15) 同、二五七頁
 - (16) 『奇跡に関する日本の伝説』参照。日本語からの翻訳、序文および解説は、A・N・メシエリャコフ、モスクワ、一九八四年
 - (17) 同、一九七頁七七・七八
 - (18) 同、一九七頁六四
 - (19) 世親『アビダルマ・コーシャ（俱舍論）』第三章「世間品」。サンスクリット語からの翻訳、序文、解説および歴史・哲学的研究は、E・P・オストロフスキーとV・I・ルドイによる。サンクトペテルブルク、一九九四年、一八六頁
 - (20) 『法華経』二八四頁
 - (21) 『ヨーガ・パタンジャリ・ヴィヤーサ・世親』。サンスクリット語からの翻訳と解説は、E・P・オストロフスキーとV・I・ルドイによる。サンクトペテルブルク、二〇〇二年、三一七頁

(T・V・エルマコフ／ロシア科学アカデミー

東洋学研究所研究員)

(訳・さとう ゆうこ／東洋哲学研究所委嘱研究員)